

B 稚 魚 関 係

I 調 査 目 的

沿岸域におけるサケ、マス幼稚魚の生態を明らかにし、サケ、マス資源の維持培養に資する。

II 調 査 内 容

1. 調査期間 自昭和49年 5 月
至昭和49年 6 月
2. 調査海域 太平洋側 白糖～六ヶ所
日本海側 深浦～岩 崎
3. 調査員 次長 頼 茂
技師 林 義 孝
" 原 口 健 二
4. 調査項目 ① 沿岸回遊状態
② 成 長
③ 食 性
④ 環 境 条 件

5. 調査方法

稚魚採集は太平洋側では六ヶ所村地先、日本海側では深浦地先の定置網によって実施し魚体調査を行なった。

気象、海象関係の環境調査については白糖（太平洋側）鯡ヶ沢（日本海側）で日観測を行ない餌料生物及び水質調査は同地先において期間中 4 回実施した。

III 調 査 結 果

- 1) サケ稚魚の本県沿岸域への回遊時期は太平洋側は日本海側に比べて一般に遅い。本年は例年に比べ水温が低目に経過したこともあって太平洋側では 6 月中旬頃迄極く沿岸域を回遊北上していたものと思われる。
- 2) サケ稚魚の成長経過については第 1 表、第 1 図のとおりであるが日本側沿岸域に滞泳する稚魚の体長範囲は 6 ～ 14.4cm 太平洋側のそれは 4.1 ～ 10.6cm と小型である。
- 3) この時期におけるサケ稚魚は殆んど空胃に近い状態のものが多くが第 2 表に示すように甲殻類を捕食している。
- 4) 環境について

サケ稚魚が本県沿岸域を滞泳する時期と思われる 4 月から 6 月にかけての水温についてサケ稚魚が離岸する水準水温 15℃ を直線式に求めると第 2 図㊦、㊧のとおりで日本海側では 5 月下旬から 6 月初めに太平洋側では 6 月中旬から 7 月初めに離岸するものと思われる。

又、サケ稚魚の餌料となる生物の出現種には差して変りはないが昨年比し時期的出現が遅れている。

IV 今 後 の 問 題

- 1) 標識放流による稚魚の成長段階を掴む必要がある。
- 2) 自県地先のみの生態調査に止まらず海域全体の問題として各県関連ある調査であることを認識し共同調査の方向で研究を、推進すべきである。
- 3) サケ稚魚の生活生態と併せてマスについても同時に調査する必要がある。